

昨年 7 月 8 日、東京で面白い講演会がありました。＜『スラヴ民族一分裂と紛争』～ウクライナ戦争の歴史的背景を深掘りする＞と題した石郷岡建氏の講演で、主催したのは故江田五月氏が会長をされていた日ロクラブという団体です。

ユーラシア大陸に初期インド・ヨーロッパ語族が現れた紀元前 6000 年頃から始まって、ユーラシアを東西に席卷する騎馬遊牧民族に度々翻弄されながら、ヨーロッパとスラヴの諸民族がそれぞれの国家を形成し、第一次大戦から第二次大戦を経て現在に至るまでの歴史の流れを、大胆に一気に語る内容で、とても勉強になりました。同じスラヴ民族であるロシアとウクライナが戦争にまで踏み込んだ歴史背景を読み解く参考資料として有益です。

編集に少し時間がかかりましたが講演録にまとめ、石郷岡氏の校閲と了解を得て、本誌に掲載させていただくことにしました。(編集部)

講演録

『スラヴ民族一分裂と紛争』

～ウクライナ戦争の歴史的背景を深掘りする

石郷岡 建 (元毎日新聞社モスクワ支局長)

あまり知られていませんが、スラヴ民族というのはヨーロッパで一番大きな民族です。ヨーロッパというとほとんどの人は西欧をイメージするのですが、西欧だけがヨーロッパではありません。東欧を含めたヨーロッパ全体を見た場合、スラヴ民族が一番大きな民族であるということです。ヨーロッパ地図を見るとよく分かります。ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、旧ユーゴスラヴィア、ブルガリアがスラヴ民族の国で、あとは非スラヴ民族です。東欧のほとんどはスラヴ民族ですね。

本日は、ウクライナ戦争の歴史的背景を理解する一助として、ヨーロッパとスラヴ民族の歴史についてお話しします。大学で 12 回に分けて行った講義を一度に全部話すのは無理なので、かなり端折った話になります。途中で終わればそこまでということでご了解ください。

南北に分かれるユーラシア大陸の地形

ユーラシア大陸全体の地形図を見ると、インド亜大陸が南からユーラシア大陸に衝突し、地形を盛り上げ、ヒマラヤ山脈やそれに連なるカラコルム、ヒンドークシといった山脈系が形成されました。ユーラシア大陸の北と南が、この長い山脈の壁によって分断され、南北の交流がさえぎられたのです。

インドは亜熱帯気候ですが、南の暖かい湿った風が高い山脈にさえぎられ、山の向こう側は乾燥地帯・砂漠となっています。ヒマラヤ山脈系の北側は砂漠地帯で、その先は草原地帯、森林地帯と続き、最後は凍土（土壌が半永久的に凍結したツンドラ地帯）が広がっています。大陸の気候は、南から熱帯・亜熱帯気候→山岳気候→乾燥気候→温暖草原気候→寒冷気候→極寒気候と変わることになります。

さまざまな人々が住むユーラシア大陸

砂漠、草原、森林、凍土ということで何が言えるかというと、国というのは、普通は砂漠の国とか草原の国、森林の国という風に分かれていることが多いのですが、ロシアに関しては全部の気候・土壌形態が、一つの国の中に存在することになります。

基本的には、東西に伸びる地形体系、つまり、砂漠だとか草原だとかが横に広がり、同じ生活共同体の人が住んでいることが多いです。しかし、南北の縦の線でみると、異なる気候・土壌に違う人々が住んでいて、砂漠に住む人と森林で暮



らす人とは全然違うということになります。南北の縦線に同じ共同体は作りにくいということになります。砂漠には羊やラクダを連れて歩く遊牧民が住んでいます。草原にも遊牧民はいますが、だんだん牛とか豚が出てきて、農耕民が増えていく。森林には狩猟民がいて、さらに遠く北へいくとトナカイの遊牧民がいたりします。

このような生活体系が全部あるということは、どういうことかということ、域内にさまざまな部族共同体、民族共同体があって、これらの軋轢と対立がいろいろ問題を引き起こすということになります。砂漠・草原の遊牧民族と草原・森林の農耕民族では生き方が違います。生活だけでなく、気質や家族意識、世界観も違うわけです。これを一つに纏めなければいけないというのが、実は大きな問題になってくる。スラヴ民族、とくに東スラヴの近代化では、この問題が常につきまといました。

東西を行き来した人々と文化

ちなみに、ユーラシアの東西の流れは、人々の交流が容易になるということで、特に、動きやすいのは砂漠と草原ですね。森林は移動が困難です。

ということで、ユーラシア大陸で人々の大きな動きは、砂漠と平原にあった。つまり、遊牧民族が大きな力を持っていたということです。

ユーラシア大陸の東西関係を見ると、いろいろなものが流れています。わかりやすいのは食べ物（料理）です。餃子は中国の代表的な食べ物の一つですが、ユーラシア各地に同じような料理があります。モンゴルではボーズやホーショール、ロシアにくるとペリメニ。ペリメニの中に詰める肉は、凍土や森林地帯では熊とかトナカイですが、草原になると牛や豚になる。砂漠地帯では羊肉です。カザフスタンやトルコにも餃子と同じような料理があります。ウクライナではヴァーレニキ、イタリアにもラビオリという餃子型の料理があります。私は、この状況を、ユーラシア大陸の東西に広がった「餃子文化圏」と話すようにしています。

同様に、チャーハン（焼き飯）もそうですね。ただ、いったん炊いたご飯から作らずに、生米から作っていく料理の方が一般的です。これも中国からイタリア、スペインまで全部ある。ロシアや中央アジアではプロフ、イタリアに行くとピラフ、スペインではパエリアです。

このように、シルクロード以前からユーラシアの砂漠・平原では、人々が移動し、東西にさまざまな文化や食事、技術情報が流れていました。

ヨーロッパも南北が分かれる～地中海文明と蛮族地域

ユーラシア大陸の西端にある欧州も、ピレネー、アルプス、カルパチアの三つの山脈を境に南北に分かれています。三つの山脈は、古くはローマ帝国（地中海文明）とその北に



あるバーバリアン（蛮族地域）との境界線でした。これら山脈の北および東には、北ドイツ平原、ポーランド平原、ウクライナ平原、ルーマニア平原があり、この平原にアジア系の遊牧騎馬民族集団が東から押し寄せ、ローマ帝国の辺境を脅かしたわけです。これらの人々は遊牧民族が多かったのですが、平原の北の方には森林地帯もあり、地域によっては農耕民族や狩猟・採取民族などが住んでいました。

東欧地域をもう少し詳しく見ると、ウクライナ平原の西にカルパチア山脈が北西方向に向かって延びています。その南にルーマニア平原があって、さらに、西へ山岳地帯を越えるとハンガリー盆地です。その南のユーゴスラヴィアは山岳地帯です。このハンガリー平原に入ってきてローマ帝国の崩壊を呼び起こした騎馬遊牧民族がフン族で、ハンガリーはフン族の末裔たちの国でした。欧州のアジア系民族ともいえます。

ちなみに、フィンランドとエストニアも、アジアを源にする民族とされます。フィン・ウーゴル民族です。もっとも、これらアジア系を祖先とする民族は、長い歴史の中で欧州民族と交じり合い、アジア系とは言えない容貌の人たちになっています。

スラヴ族

ウクライナ平原からポーランド平原に住んでいたスラヴ族は、この遊牧民族の欧州への移動騒ぎに巻き込まれ、分裂や統合を繰り返しました。時代が下ると、ドイツ平原から東へ侵入するゲルマン民族にも翻弄されます。現在、スラヴ民族は、カルパチア山脈の北（ポーランド、チェコ、スロヴァキア）、東（ロシア、ベラルーシ、ウクライナ）、南（旧ユーゴ諸国、ブルガリア）に分断され、分散して生活しています。

では、スラヴ民族はどこから生まれ出てきたのか。古代文明の一つ、チグリス、ユーフラテス川の上流に出現した初期インド・ヨーロッパ語族が北のコーカサス山脈を越えてユー

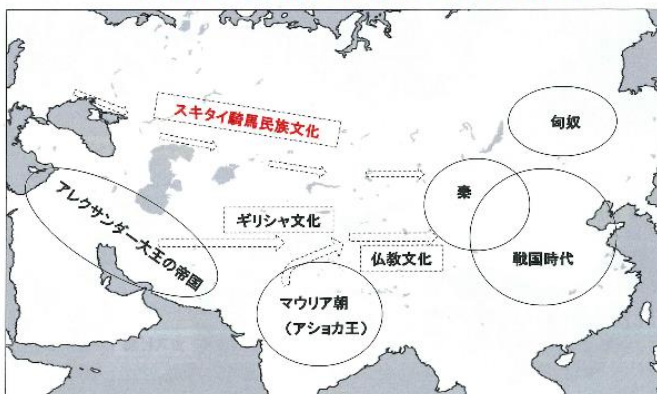


ロシアの草原に移動してきたのが紀元前 6000 年頃と言われています。このインド・ヨーロッパ語族から、ゲルマン、スラヴ、バルト、それからケルトなどさまざまな欧州語族の祖先が生まれ、西のヨーロッパへと向かいます（紀元前 3000 年頃）。同時に、東の中央アジアを徘徊した民族もいました。インド、イラン、クルドといった現在のインドや中東地域に住む人たちで、彼らも同じインド・ヨーロッパ語族です。

最初の騎馬民族スキタイ族

紀元前 1600 年頃、コーカサス山脈の南のアナトリア地方にヒッタイトという民族が現れます。古くから鉄器を使いこなした民族と言われています。ヒッタイトに近い民族で、古代東イラン系騎馬民族がスキタイです。ロシア南部からウクライナの黒海沿岸地帯に現れて繁栄したのが、紀元前 600 年頃から紀元後 200 年頃です。スキタイに追われ、スラヴ系の人たちは遊牧民から距離をとって北へ北へと逃れて行くことになります。

ユーラシアの歴史（紀元前 4～3 世紀） —文化(文明)は、西から東へと移動した。



スキタイ族は馬を使って、自由自在に草原地帯を駆け巡りました。馬を使うことから行動半径が広がり、スキタイ騎馬民族の文化は「草原の道」を経て、遠くモンゴルやシベリア、中国北部にも及び、各地にその痕跡を残しています。スキタイが活躍した紀元前 4～3 世紀には、西の地中海でギリシア都市国家群が栄え、ローマ帝国が勃興します。東の中国では

匈奴が現れ、秦の始皇帝が中華統一を果たします。アレクサンダー大王の大遠征（紀元前 334 年～323 年）でギリシア文化がインド北部に及び、その後インドの仏教文化が中国に伝わり、西から東へと様々な流れがあったのです。この時期、古代文化（文明）は西から東へと向かって動いていたとなります。

ユーラシアの民族大移動の始まり（紀元 1～2 世紀）

ユーラシアの民族大移動は何回もありますが、スキタイ族の東への移動時代後は、ほとんど東から西への逆の流れになります。つまり、アジアから欧州への流れです。

秦の時代に匈奴が中国北方を脅かしましたが、その後、南北に分裂して勢力が衰えていきました。その隙をぬって中国

ユーラシアの動き（紀元 2～1 世紀）

遊牧騎馬民族(アルタイ語族)は、東から西へと大移動した。



東北部で鮮卑が力をつけます。鮮卑の圧迫で、その西にいた北匈奴がさらに西へ移動する。北匈奴に押されて、フン族がカスピ海の北から黒海の方へ移動する。フン族の移動で、黒海の北にいたゴート族がローマ帝国へ近づいていきました。

ゴート族は古代ゲルマン系民族で、ドイツ平原から南下し、紀元 50 年頃には黒海沿岸に住んでいました。そのゴート族の侵入がローマ帝国の衰退につながります。ゴート族の移動は欧州の民族大移動を引き起こす結果になったとされます。このような「玉突き現象」が歴史上何回も起こりました。

キリスト教文化圏と西欧概念の形成

キリスト教はユダヤ教から生まれたわけですが、当初はローマ帝国に弾圧されたものの、やがてローマ帝国の国教となって発展していきます。アルプス山脈、ピレネー山脈を越えて、バーバリアン（蛮族地域）、つまり現在のフランスやドイツ、スペイン、ドイツ、イギリスにも流れ、キリスト教文化を広めました。しかし、東のカルパチア山脈から北側、ドイツ、ポーランド、ウクライナ、バルトについては、紀元 2 世紀の時点では、まだキリスト教文化圏ではありませんでした。このキリスト教文化圏の拡大が西欧という概念の形成に大きく関わっていきます。キリスト教文化であるかないかということが、歴史上いろんな場面で大きな問題を作ることになり

ます。

ユーラシアの民族大移動第二波～フン族の欧州襲来

ユーラシア民族移動の第二波は、紀元 3 世紀から 6 世紀にかけて起こります。中国北部に柔然が勃興し、それに押されて高車という民族（現在のウイグル人の祖先とも言われています）が西に逃れ、これがエフタル族（中央アジア）→アラン族（カスピ海北東）→フン族（黒海北岸）との玉突きを起こす。

ユーラシアの歴史（紀元 3～6 世紀）

東から西へ、民族の大移動(その2、**フン族の欧州襲来**)。



さらに、フン族に追われて、ゴート族がまずローマ帝国に入り、さらにフン族も侵入する。ゴート族とフン族の襲来がローマ帝国の衰退と解体を、決定的にもたらしたとされます。

フン族を描いた絵があります。おそらく想像図ですが、明らかにアジア人の侵入で、ヨーロッパにとっては非常に恐ろしい出来事だったわけです。

ただし、遊牧民族というのは大きな人口の共同体を作らないという特徴があります。羊などの餌は主に、草原地帯にあり、餌がなくなると、別の場所に移動するという彼らの生活です。人口密集地域になると、餌の中心である草原の奪い合いになり、移動するのも大変です。遊牧生活を守るためには、小集団の方が動きやすい。そもそも、遊牧民は水が少ない、乾燥地帯に住んでおり、水の補給の観点からも大きな共同体は作れないとなります。

このため、フン族は、ヨーロッパ遠征のために、征服した地域の人々を自分の軍隊に引き入れ、連れて行くという軍組織を作りました。フン族は、トングース、朝鮮、チベット、イラン族を引き連れ、374 年にヴォルガ川を渡り、欧州へ進出したとされます。さらに、スラヴ、フィン・ウゴールなどの各部族を支配下に置き、ゴート族と衝突し、ハンガリー平原に入ってフン帝国を築きました。5 世紀前半にアッティラという指導者が現れて最盛期を迎えます。アッティラの母親はヴォルガ川地域出身と言われているので、もしかしたらスラヴ族だったかもしれません。フン帝国は、東ヨーロッパからウクライナ、ロシア南部、中央アジアにまたがる広大な地



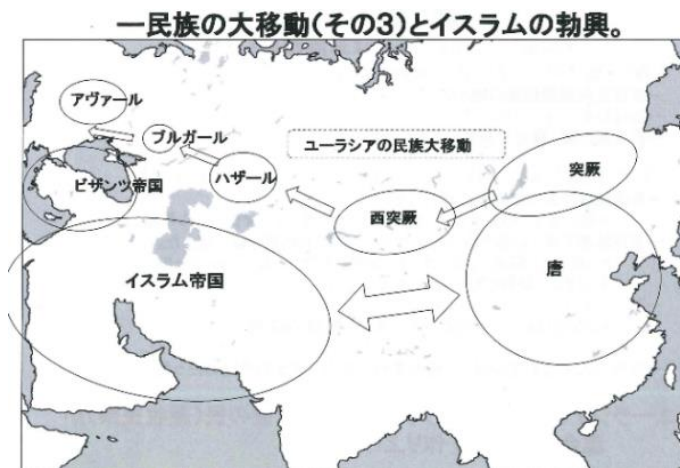
「アラン族と戦うフン族」ヨハン・ネポムク・ガイガー画(1873 年)

域を支配したのですが、アッティラの死後、内紛により瓦解しました。

ユーラシアの民族大移動第三波（紀元 7 世紀）

次の民族大移動は紀元 7 世紀に起こります。6 世紀の半ば中国北部に、今度は突厥という民族が出てきます。この民族も、現在のウイグル人と同じ血が流れていると言われています。隋・唐による中華統一の少し前です。突厥は 6 世紀末に東西に分裂し、西突厥が西へ移動、西突厥→ハザール族→ブルガール族→アヴァール族と玉突きを起こします。

ユーラシアの歴史（紀元 7 世紀）



この民族大移動で、アヴァール族は、フン族のあとに、ハンガリーへ進出します。この玉突きの中に出てくるブルガール族は中央アジア系の遊牧民族です。のちに、西へと移動し、バルカン半島を南下し、南スラブ族と混合し、ブルガリアという国を作ることになりました。つまり、今のブルガリア人は、民族的には南スラブ民族と分類されますが、その源をたどると、ボルガ川の上流から出てきた人々の血も流れている、となるかもしれません。

カスピ海の北にはハザール族というあまりよく分かっていない不思議な人々もいました。ユダヤ人ではないのに、ユダヤ教を国教にした人たちです。

スラヴの昔話では、ユーラシア地域の人々が宗教を受容する時には、3 つの宗教から選択するという問題が常にあり、その中からどれを選ぶか悩んだ、という話が多くあります。その三つの宗教というのは、イスラム教とキリスト教とユダヤ教ということが多いです。ハザール族はユダヤ教を選んだというわけです。

ちなみに、ロシアは東ローマ帝国（のちのビザンツ帝国）のキリスト教（東方正教）を選びました。ただし、ロシアの三つの宗教の選択は、東方正教、カトリック教、イスラム教だったという話になっています。

昔話の中で、三つという数字があまりにも、あちこちに出てくる背景には、キリスト教の「三位一体」の教えの影響があったのではないかと、私は思っています。

ハザールの話に戻ると、コーカサス（カフカス）地方の東側には、山岳ユダヤ民族という人たちがいました。この人たちが、ハザールの祖先ではないかとも言われているのですが、はっきりしません。

総括すると、東方遊牧民族が大移動を繰り返す中で、ユーラシア大陸の広大な草原地帯と森林地帯には、フン族、アヴァール族、ブルガール族、スラヴ族、バルト族、フィン・ウゴル族といったさまざまな部族というか、一つの民族を形成する以前の前段階の集団が形成され、衝突し、混じり合っていたということになります。

ユーラシアの歴史～森と草原の戦い

ユーラシアの歴史を、別の面から見ると、森と草原の戦いなんですね。ユーラシア大陸の東西を走る高い山脈の北側には砂漠地帯があり、さらに北へ上がると、広大な草原地帯と森林地帯が東西に連続しています。森と草原の戦いを整理して言うと、次のようなことが言えるかもしれません。

①森は湿潤気候で、森の中の移動は困難が伴うため、定住農耕民族の地となった。森は勤勉で保守的な農民気質を育てた。しかし、森は長い間、歴史と発展から取り残されていた。

②一方、草原は乾燥気候で、障害物のない土地が広がり、人々の発展の場だった。モンゴル、中央アジア、南ロシア、ウクライナ、マジャール平原といった草原地帯を、馬と武器を巧みに操った人々が駆け巡った。遊牧騎馬民族にはスキタイ、匈奴、フン、ゴート、突厥、アヴァール、ブルガール、モンゴル、タタール、ジューンガルなど、

非常に沢山の集団がいました。草原は危険ではあるが、人々をつなぐ技術・文化交流の場でもあったのです。

それは、「シルクロード」であり、「毛皮ロード」であり、「餃子・饅頭・麺の道」でもありました。草原は自由で、独立心にあふれ、戦闘的で気ままな気質を育てました。草原の人々は移動を好み、技術革新に富み、発展の場だったのです。

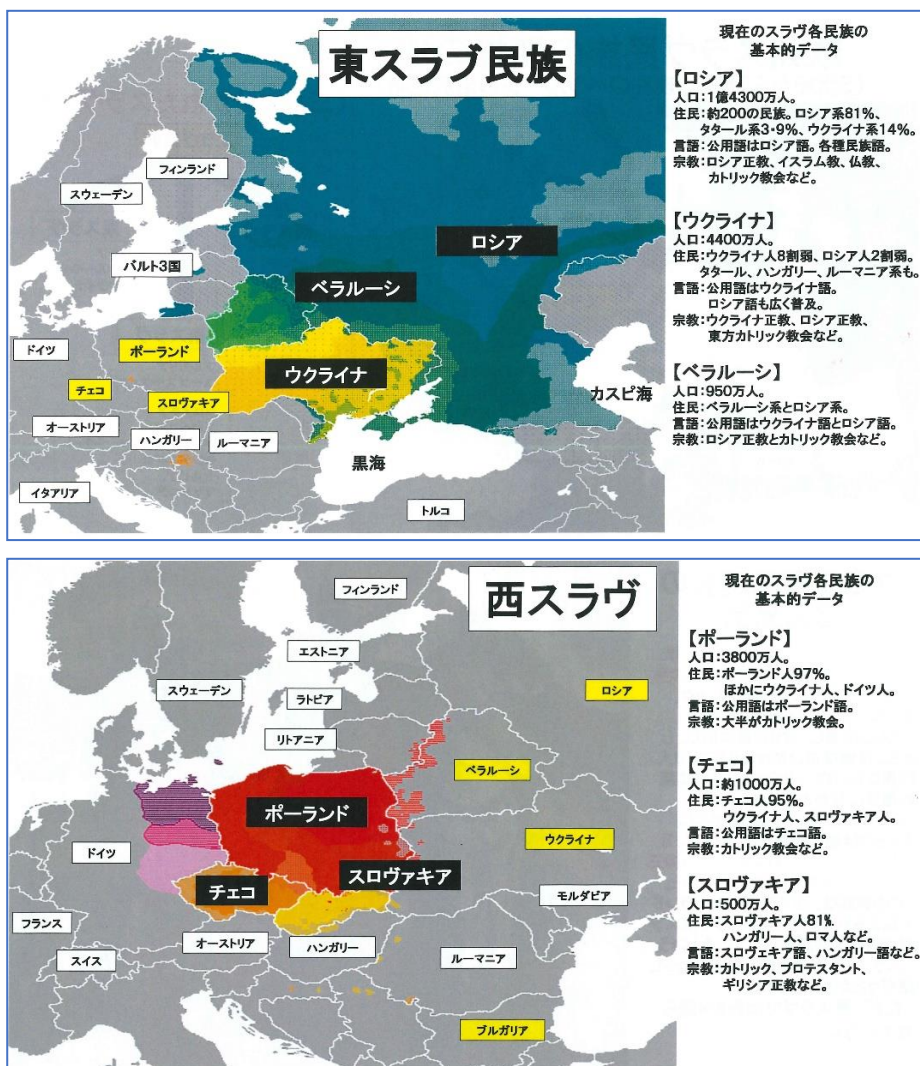
近代以降は、「遊牧民」というと、定住せずに移動を繰り返す、乱暴で無秩序な人たちと思われがちです。しかし、実際は全く違っていただけです。ただ、森の民と草原の民がはっきりと分かれていたわけではなく、その境界線は非常に曖昧だったとも言えます。ユーラシアは「森の民」と「草原の民」が混合して歴史を作り上げたとも言えます。

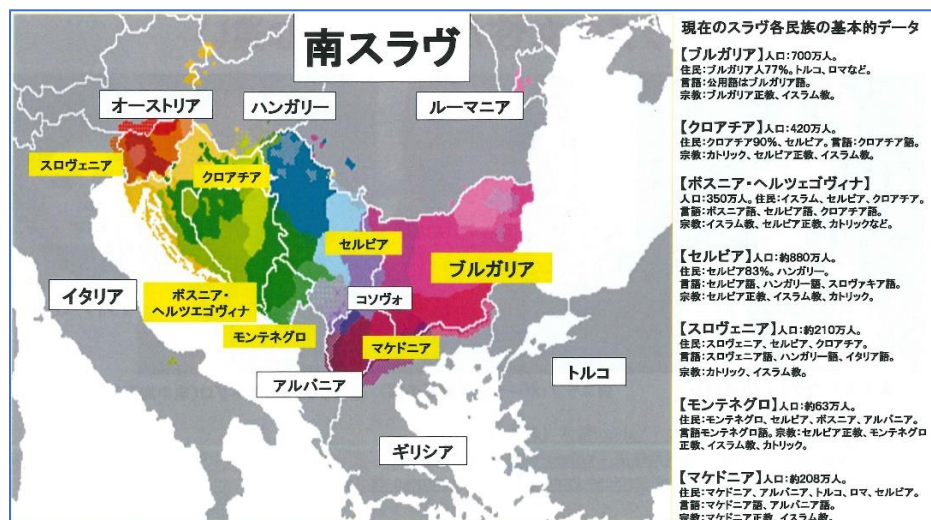
つまり、スラヴ系を含めた欧州諸民族は、農耕系の保守的な農民気質の人たちと、危険ではあるけれど自由で独立心に溢れた遊牧系の人たちの二つが交わった共同体で、単純には割り切れない多彩な顔を持った人々がいたということになります。

古代スラヴ民族

それではいよいよ本題。欧州スラヴ民族の話に移ります。

《資料》現在のスラヴ民族の基本データ／地図と数字





スラヴ族は、その昔コーカサス山脈を越えてきた初期インド・ヨーロッパ語族の中から派生したわけですが、コーカサスから北西に移動して、5世紀から7世紀にかけて、黒海とバルト海の間、現在のベラルーシの沼沢地帯に古代スラヴ族が集住するようになります。ここは草原と森林の間ですね。つまり、農耕をしつつ、遊牧騎馬民族が侵入してきたときは森に逃げ込むわけです。

東の中央アジアなどから、フン族、アヴァール族、ブルガール族など遊牧騎馬民族が絶え間なく襲来してきました。西からはゲルマン族がやって来る。その度にあちこちへ逃げるわけですが、その結果、スラヴ族は、西スラヴ、東スラヴ、南スラヴの3つに分かれ、やがて別々の道を歩むことになります。

スラヴ国家建設3人兄弟神話

スラヴの国家建設についての神話があります。

その昔、スラヴ民族の先祖にあたるパンノニヤという女性から3人の男の子が生まれました。名前は、レック、ルーシ、チェックと名づけられた。3人は成長し、狩りの旅に出た。しかし、獲物を追いかけるうちに、3人はそれぞれ異なる方向へと向かい、離れ離れに分かれてしまった。レックは北、ルーシは東、チェックは西に向かった。そして、レックはポーランド、ルーシはロシア、チェックはチェコの三つのスラヴ国家の創始者となった、という話です。

この神話は西スラヴのポーランドで伝えられているものですが、南スラヴでも同様の話が別の組み合わせであるそうです。おそらくスラヴ3民族の団結と結束を願った話だったのではないかと思います。ただ、この3兄弟という話は、なぜか東スラヴではあまり語られていません。

スラヴの女性たちの微妙な違い

東、西、南の3つのスラヴはどう違うのか。女性の顔で比較を試みると、東スラヴは丸顔の人が多い。西スラヴは細長

の顔です。南スラヴになると地中海系というか目鼻立ちのくっきりした顔で、その代表は女優のソフィア・ローレンです。日本人は、東スラヴの人を見ると可愛いと感じるようですが、ソフィア・ローレンはどうだと言うと、ちょっとバタ臭く、あまり、近づけないという感じではないか思います。しかし、ヨーロッパでは美人の典型は丸顔ではなくて、ソフィア・ローレンですね。だから日本人は丸顔のロシア人を好ましく思うかもしれませんが、ロシアの人たちは南の地中海系の顔を非常に羨ましく思っているようです。



ソフィア・ローレン

東スラヴとヴァリャーグ（ノルマン系ヴァイキング族）

スラヴ民族の成り立ちにもどります。歴史的には、人々はある種の集団を作って生きてきました。まず最初は家族関係の集団を作る。それが大きくなって部族になって、いくつかの部族が部族集団を作り、さらに部族集団連合を作る……、というような形で発展していきました。このような部族集団としてスラヴ民族の人々は、黒海とバルト海の間、東ヨーロッパ平原とポーランド平原、南のバルカン半島など、あちこちに分散しました。

9世紀ごろにはスロヴェネ人、クリウィチ人、ボロチャーネ人、ポーランド人、シレジア人、チェク人、モラビア人、クロアチア人、セルビア人、ブルガル人……、これら様々なスラヴの部族と人たちが広範囲に住んでいたとなります。そして、多数の部族集団が各地に形成されますが、まだ混沌としていて大きなまとまりにはならなかった。

「ヴァリャーグ」と「東スラヴ」の出会い



「リユーリクとその兄弟を出迎えるスラヴの人々」

ヴィクトル・ヴァスネツォフ画

ヴァイキング族というのは海賊をしながら、商人もやっていた人たちです。ドニエプル川を伝わって黒海に出たのは、当然その先にあるコンスタンチノーブル、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）との交易が目的でした。

[illegible]

ヴァリャーグが東スラヴ地域に侵入した時、首長のリューリクは北のノヴゴロドを最初に征服しました。リューリク公の後を継いだオレグ公が、キエフへと南下し、キエフを本拠地とするとともに、東スラヴ諸族の大半を支配下に置きました。オレグ公の後、イーゴリ公、スヴャトスラフ公と続くのですが、「キエフ・ルーシ」を含む周辺地域へと大きく領土を広げ、「キエフ・ルーシ国家」、キエフ大公国を作り上げていきました。

つまり、ヴァリャーグの指導者たちによって東スラヴの諸部族はスラヴ部族連合へと統合され、キエフ大公国という国家を作り上げたということだったと思われます。

紀元 11 世紀、キエフ大公国はヨーロッパ東端の大国とな
っていきます。一方、ルーシに進出したヴァリャーク族は、
スラヴ共同体に呑み込まれ、同化し、埋没し、歴史から消え
ていきます。

東方正教会の受容～988 年ウラジーミル大公の時代

キエフ大公国はウラジーミル大公の時代、988年に東ローマ帝国（ビザンツ帝国）のキリスト教（東方正教）を国家宗教として取り入れます。昔話によれば、どの宗教を選ぶかということになり、スラヴ族はビザンツ帝国の壮大な教会建築を見て、東方正教会を受け入れたとされます。

ロシアの作曲家ヴォロディンは、スラヴ部族と遊牧民族ポロヴェッツ族の戦いを描いたオペラ「イーゴリ公」を作りました。このオペラの中で演じられる「ポロヴェッツの踊り」は、日本では「韃靼人の踊り」と呼ばれています。実際は韃靼人ではなく、ポロヴェッツ人だったのです。騎馬民族モンゴルが西へ進出した際、モンゴル族の戦いの先頭に立ったのが、韃靼部族だったためとされます。

さらに、モンゴルが中央アジアへ進出した際、中央アジアのチュルク系部族集団が、モンゴルの支配下に入ります。次はこのチュルク部族集団が、韃靼族に代わり、最前線に立ったとされます。のちに、タタールと呼ばれていた人たちです。

このタタールという呼称は、「韃靼」という言葉から来たともいわれています。

その後、ボルガ川東岸地域の中央アジアのチュルク系遊牧民族は、すべてタタールと呼ばれるようになります。スラヴ民族にとっては、モンゴル部族と接触・戦うことはあまりなく、中央アジア系遊牧民族のタタールとの接触が多く、東からきたのはモンゴル人ではなく、タタール人と戦っているとの意識の方が強かったということだったと思います。

モンゴル軍団が西洋に侵入し、生肉を食べていたことから、「タルタル料理」という言葉が生まれたとされます。そのタルタルという言葉は、タタール人からとったとも言われています。

時代が下ってロシアがモンゴルの支配下に置かれた時代は、「タタールのくびき」と呼ばれることになります。モンゴル・タタールがスラヴ民族を支配し、国家として発展が遅れたとの意味を含めています。

しかし、最近では、西欧歴史家の一方的解釈で、果たしてスラヴ民族が「くびき」という状態だったのか、モンゴルの支配下で苦しんだという説が正しいかどうか、疑問視されています。モンゴル帝国は、騎馬民族を使って、ユーラシア大陸を席卷し、様々な文化や技術、軍事手段を発展させていました。さらに、情報・通信網システム等も作っており、モンゴル帝国の方が明らかに国家発展が進んでいたという主張が出ています。

ロシアを含むスラヴ民族地域の軍事・経済・文化水準は、モンゴルに比べると、強力な軍事・その他技術を持っていない貧しい集団社会で、「モンゴルのくびき」で、ロシアの発展が遅れたという話は実態を表していないとの指摘です。特に、モンゴルでは、この主張が強いです。

南スラヴ世界の発展（10 世紀～14 世紀）

ではこの頃、南スラヴはどういう状況だったかと言うと、南スラヴ民族はバルカン半島へと南下して、バラバラに分かれます。なぜかという、山岳地帯が多いので、それほど大きな領域を占めることができなかったわけです。その中で一番大きな国を成したのはブルガリアです。ブルガリアに入ったのはブルガールという中央アジア系のタタール系部族連合集団ですが、南下してきたスラヴ族と混血して、ブルガリア民族を作り上げていきます。ブルガール族が南スラヴ族と合流してブルガリア王国を創設したのは 9 世紀のことでした。その後、ブルガリアはオスマン帝国の支配・影響下に入り、トルコ民族とも混合することになります。

バルカン半島では、10 世紀ごろにセルビア、クロアチアなどがまとまりを見せ台頭します。いわゆるユーゴスラヴィアですね。ユーゴスラヴィアの意味は、ユーゴ＝南なので、要

するに「南スラヴ」ということです。ただ、南スラヴ族は地理的な要因とともに、宗教も違ったりして、小さく分かれてしまいました。

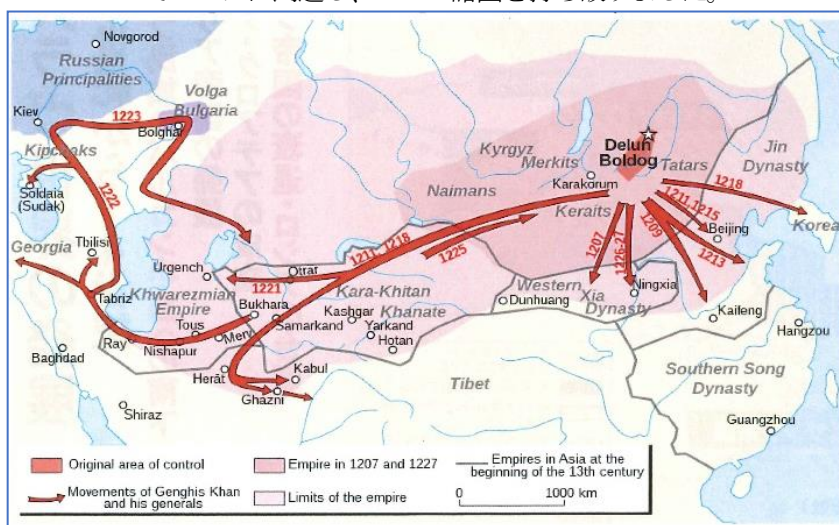
14 世紀になると中央アジアのオスマン族（チュルク民族）が南下し、ついにビザンツ帝国（東ローマ）が滅亡します（1453 年）。オスマン帝国の時代が始まり、以後、南スラヴ民族はトルコとの対立・隷属の時代に入ります。

モンゴル帝国のユーラシア大陸統一（紀元 13 世紀）

12 世紀末、北東モンゴルのキヤト族にテムジンという名の男の子が生まれました。テムジンは、モンゴルの各部族集団をまとめ、部族集団連合を結成して、モンゴル周辺部族を平定・支配し、1206 年オノン川上流で開かれたクリルタイ＝部族連合会議で、チンギス・ハンと名乗ります。

チンギス・ハンに率いられた蒙古騎馬軍団は、中国北西部の西夏（タンгут族）、東北部の金（女真族）を破り、さらに南の南宋（漢族）を平定して中国全土を支配下に置きました。

1218 年から 23 年にかけて、モンゴル軍は中央アジアへ遠征し、サマルカンド、ブハラなどを襲い、アフガニスタンにも侵攻します。さらにカスピ海の南を回り、コーカサスを経てロシアに到達し、ルーシ諸国を打ち破りました。



モンゴルの欧州来襲 (1223 年～1242 年)



度と立ち上がることができず、結果的にウクライナ・ルーシはロシア・ルーシの発展を超えることができませんでした。つまり、小ルーシ（ウクライナ）と大ルーシ（ロシア）との格差の構図が成立したのです。これが今日のウクライナ問題の根底にある話でもあります。

図は、モンゴル軍のヨーロッパ遠征の全体図です。キエフを襲う前にモスクワやノヴゴロドにも行き、キエフの後には、ポーランド、神聖ローマ帝国、ハンガリー、セルビア、ブルガリア等の国々も襲っています。

ただ、ポーランドのレグニッツというところでモンゴル軍は敗退します（1241 年）。欧州遠征は終わります。それでも地図の茶色の部分が遊牧騎馬民族の占領地域、薄黄色の部分がルーシ諸公国で、その後長く、モンゴルの支配をうけたことが分かります。

モンゴル軍は南部の草原地帯については東西交易ルートを押さえるため直接統治を行いました。農耕定住民が住む北部の征服地については、その地の首長（ルーシ諸侯）を通じて税の貢納と軍役を課す間接統治を行いました。また被支配地の宗教や文化についても寛容であったとされます。

モンゴル支配下の東スラヴでは、新しく出現したスラヴ部族連合の中で、後のロシアとベラルーシとなる国家が、次第に現れてくるのですが、ウクライナは南部平原のモンゴル系キプチャク・ハン国の圧力で国家として、まとまることがなかなかできなかったのです。

モンゴル支配は約 250 年間続きました。しかし、遊牧騎馬民族が非常に大きな力があつた時代は 15 世紀の末頃に終わります。ユーラシアの広大な地域を支配した後、モンゴル帝国が突如崩れていきます。何故なのかよく分からないのですが、私の想像では気候的な変動があつたのではないかと気がしています。

ドイツ・ゲルマン民族の東方拡大 (10 世紀～15 世紀)

このモンゴル軍の欧州来襲およびルーシ諸公国支配の時

期に一部重なる話なのですが、西からはドイツ・ゲルマン民族の東方拡大が始まります。

その頃、西スラヴでは、ヨーロッパを東西に分かつ境界線と言われたエルベ川の近くまでスラヴ族が住んでいたのですが、ドイツ民族がエルベ川から東のオーデル川へと東方植民を広げ、ここにゲルマン民族とスラヴ民族がぶつかることになります。

13 世紀から 14 世紀にかけて、ドイツ騎士団がバルト・スラヴ地域へと植民を拡大していきます。ドイツ騎士団（聖母マリア騎士修道会またはチュートン騎士団）です。カトリック教会組織で、聖地パレスチナへのキリスト教徒巡礼を護衛するために

1198 年に作られたとされます。途中からパレスチナに興味をなくし、「北方十字軍」と称して東方に進出、非キリスト教徒を制圧し、バルト海沿岸地域の支配を進めました。特にプロシア（古代プロイセン）では、住民の大虐殺を行ったと言われています。

ドイツ騎士団が建設または支配した東方移民都市には、クールラント地方（現ラトビア）、クライペダ（ドイツ名メーメル/現リトアニア）、カリニングラード（ドイツ名ケーニヒスベルク/現ロシア連邦）、グダンスク（ドイツ名ダンツィヒ/現ポーランド）、ズデーテン地方（現チェコ）などがあります。



タンネンベルクの戦い～ドイツ騎士団の敗退

欧州に襲来したモンゴル軍を、1241 年にレグニッツアの戦いで撃破したのは、ドイツ騎士団とポーランドの連合軍でした。その後、この地域ではリトアニアと東スラヴ系「ルテニア」の国家連合が成立、1236 年、リトアニア大公国が出現します。ドイツ騎士団と対立し、絶え間なく戦いが続きました。

1410 年 7 月、ドイツ騎士団とポーランド・リトアニア連

合軍が激突し、ドイツ騎士団が敗北しました。この戦いは、ドイツ語では「タンネンベルクの戦い」、ポーランド語では「グレンヴァルトの戦い」、リトアニア語では「ジャルギリスの戦い」と呼ばれています。

ゲルマン系ドイツ民族とスラヴ・バルト民族の東西対立だったわけですが、この戦いで、スラヴ・バルト民族の優勢が決まり、ドイツ民族のポーランド・バルト地域への拡大が止まります。

しかし、ドイツの東方拡大により、バルト地域でのカトリック教会の地位が固まり、西スラヴはカトリックもしくはプロテスタント地域になります。東スラヴは東方正教会地域にとどまるという宗教的分裂・対立が始まることになります。

なお、タンネンベルクの戦いですが、第一次大戦中の 1914 年 8 月にもドイツ軍とロシア軍がタンネンベルク近郊で衝突し、ロシア軍が大敗しました。この戦いは、ソルジェニーツィンの「1914 年夏」という作品に詳しく書かれています。

リトアニア大公国の拡大 (1240 年～1462 年)

東スラヴの諸公国はモンゴルの襲来で大きな被害を受け、長らくその支配下に置かれました。ルーシ諸公国でモンゴルの支配下に入らなかったのは北のノヴゴロドだけでした。

一方、モンゴルを敗退させ、ドイツ騎士団を撃破したリトアニア大公国は大きく発展して、次第に南へと支配地域を広げ、キエフ公国地域を翼下におさめます。その支配はポーランドとリトアニアの同君連合誕生(1386 年)後も続きました。北東部のロシアはモスクワ公国、ノヴゴロド公国などが国を守りましたが、ベラルーシ、ウクライナはリトアニア大公国に呑み込まれて、国を失う形となります。

ユーラシアの歴史 (紀元 15 世紀)

ーロシアとオスマン(帝国)の登場



さて、紀元 15 世紀のユーラシア全体はどうなっていたかというと、東の中国ではモンゴル帝国の一部であった「元」が倒れ、漢民族の「明王朝」(1368 年～1644 年)が成立します。中国の北にはチュルク系民族やオイラートといった遊牧民族が残っていて、西アジアにはティムール帝国(1370 年～1507 年)がありました。黒海から中東・地中海地域にはオス

マン族が中央アジアから南下し、アジア・アフリカ・ヨーロッパにまたがるオスマン・イスラム帝国(1299 年～1922 年)を築きます。

ロシアの西方進出 (1640 年～1667 年)

スラヴ地域では、1380 年にクリコヴォの戦いでモンゴル系のキプチャク・ハン国に勝利したモスクワ公国が急速に力をつけ、モンゴルの支配から脱していきます。最終的にロシアはモンゴルへの貢納をやめます。1480 年、イワン 3 世がツァーリの称号を使い、モスクワ大公国が自立しました。モスクワ大公国を中心とするロシアは、西のリトアニア・ポーランド連合と南のオスマン帝国と対峙していくことになります。

リトアニアはポーランドとの連合関係へと動きます。そして、次第にポーランドとの同質性を強め、ポーランド化していきます。東のロシアは西部へと進出し、ポーランド・リトアニア連合に圧力をかけ始めます。

一方、ウクライナとベラルーシの両民族はリトアニア・ポーランドの支配下にありました。1648 年にザポロージェ地域で、コサック集団の指導者フメリニツキーが反乱を起こします。クリミア・ハン国のタタール人と連合を組んで、現在のウクライナ西部へと進軍し、この地からポーランドとリトアニアを追い出し、抑圧を解放したとされます。

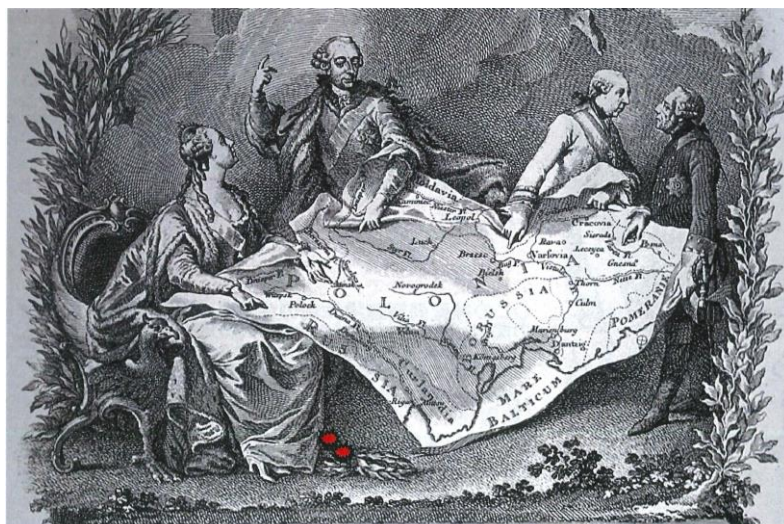
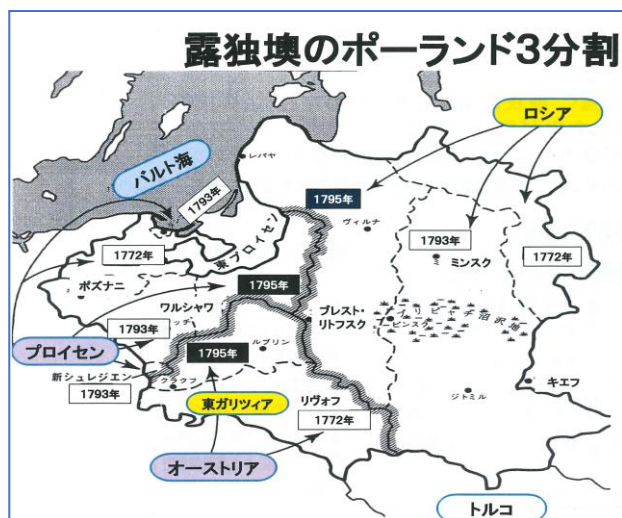
フメリニツキーはウクライナ民族再興の英雄とされているのですが、一方でロシアの支援を受けてその保護下に入っていたので、現在のウクライナでは評価が分かれているところです。また、反乱の際、フメリニツキーはユダヤ人の大虐殺を行ったことでも有名です。

ロシアは、フメリニツキーの反乱の前からリトアニア・ポーランドとの戦争を繰り返し、モスクワに攻め込まれたこともありましたが、やがて力をつけ、東スラヴの旧キエフ大公国の領土を奪っていきます。1667 年、ポーランド・リトアニア連合は、ドニエプル川東岸地域をロシアに引き渡し、急速に力を失っていきました。

この後、ロシアではピョートル大帝が欧化政策を推し進めて国力をつけ、北のバルト海に進出、さらに黒海・クリミア方面への南下圧力を強めます。同時に、ロシアは 16 世紀末から 19 世紀にかけてシベリアを東進し、ベーリング海からアラスカに至る世界最大の領土を持つ帝国を築いていくことになります。

独露境のポーランド 3 分割 (1772 年～1795 年)

西スラヴ地域に目をもどすと、フメリニツキーの乱に乗じて北のスウェーデンが介入し、ポーランドに侵入します。このため、ポーランドはロシア・デンマークと同盟を結び、スウェーデンとの「北方戦争」(1648 年～1667 年)を戦いますが、国土が荒廃し、その後ますます力を失いました。18 世紀に入ると、ポーランドはロシアの影響下に置かれるよ



ノエル・レ・ミレ画(1773 年)

うになり、とくにエカテリーナ女帝はさまざまな内政干渉を行い、ポーランドの保護領化を進めました。この動きにオーストリアとプロイセン（ドイツ）が警戒感を持ち、結局、1772年に三国同意によるポーランドの第一次三分割が実施されます。さらに、1793年（第二次分割）、1795年（第三次分割）と続き、ポーランド国家は消滅することになります。

絵はそのカリカチュアですね。左から順にエカテリーナ 2 世（ロシア女帝）、フリードリッヒ 2 世（プロイセン王）、スタニスワフ 2 世（ポーランド国王）、ヨーゼフ 2 世（オーストリア皇帝）が、分割を討議している図と思われます。

東欧と西欧の違い

ここで少し話を変えて、東欧と西欧の違いを見ておきたいと思います。どうして東欧はこんなに国がまとまらないのかという話です。

東欧では、国がまとまらないために国民国家ができず、西欧的な近代市民社会が発達しなかったと言われています。東欧では絶対王政が確立しなかった。領主層が強く、農民が解放されなかった。農奴制が逆に発達した（再版農奴制）。さらに都市産業・文化が発達しなかったために、市民層が成熟せず、市民革命ができなかった。自由と民主主義を掲げる近代市民社会が十分に成熟しなかったとなります。

これに対して西欧では近代市民社会が発達した。その違いはなぜなのか。

紀元 1000 年の欧州地図（7 頁）をみると、西ローマ帝国の崩壊後、中世の西ヨーロッパはフランク王国、神聖ローマ帝国などに分かれています。

ここで、現在のフランスを中心とする西フランクで農業革命が起こります。いわゆる三圃制度の始まりです。三圃制度というのは農地を 3 つに分ける。1 つは小麦や大麦などの穀物、もう 1 つは家畜のえさなどをを作り、3 つめは休ませて放牧地にする。これを順番に回して地力を回復させるんですね。

さらに、牛や馬に引かせる鉄製鋤の改良で土地を深く耕

す農法が進みます。これによって農業が発達して、飢餓がなくなり、余剰農産物ができる。余った農産物を売る市場ができて、それはだいたい川沿いの港など物流に便利な場所に発達し、都市ができる。都市にはさまざまな職人や商人が集まってきて、商工業が発達し、都市文化が形成されます。

農村と都市文化の発達につれて、農村地帯を支配していた領主と騎士たちが没落し、都市の市民階級を基盤とする王権が強化され、やがて絶対君主制が始まります。絶対君主制のもとで国が一つにまとまって、王様を中心とする中央集権国家（主権国家）が出来上がる。絶対君主と都市市民階級が手を組んで、小領主や騎士たちを追い出していくわけですが、やがて今度は王様と都市市民階級が対立して近代市民革命が起こり、王政が倒れて自由・民主主義という近代国家ができたというふうに説明されています。

農業革命は東欧にも伝わったのですが、東欧地域の気候は西欧よりも寒く、余剰農産物がそれほど採れなかった。農民層が力を持つことができず、都市と商工業が発達せず、騎士や貴族階級が潰れなかった。逆に農奴制が強化されたわけです。つまり、東欧では王権の基盤を市民階級ではなく、地主貴族階級が担い続けることになりました。

これがよく分かるのは、ドイツのユンカー（Junker）ですね。ユンカーというのは、プロイセン貴族の通称で、東部ドイツ（エルベ川以東）の地主貴族です。彼らは領地内に直営農地を持ち、農民に賦役を課し、領主裁判権・警察権を行使して強力に農民を支配しました。

18 世紀以降はプロイセン王国では、貴族階級が中心となり、官僚や軍人を独占してドイツ帝国を支えました。実際、ドイツでは非常に長く、小国分立状態が続きました。

ユンカー制度は形を変えて第二次大戦の終わりまで生き残り、ナチスドイツのある種の軍事的基盤にもなったと言われています。

ポーランドも王権が弱く、封建領主である貴族が百も二百も分立して、国内がまとまらなかったために、結局、独逸露

第一次世界大戦前のヨーロッパ



第一次世界大戦後のヨーロッパ

ユーラシアの帝国時代の終焉と欧州の構造変化

第一次世界大戦は、1918 年 11 月 11 日、ドイツの降伏で終了しました。この結果、16～17 世紀（あるいはその前後）からユーラシアで大きな力を振るった帝国のすべてが崩壊・消滅しました。

ドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国、ロシア帝国などです。さらにインドのムガル帝国はイギリスの植民地＝英領インドとなって消滅（1858 年）、中国の清国も欧米列強の侵蝕の中で倒れました（1911 年辛亥革命）。

ただし、ロシア帝国はロシア革命で崩壊したけれど、ソ連邦という社会主義国家が生まれ、ここに帝国の機能が形を変えて残されました。現在のウクライナ戦争は、「ロシア帝国」の崩壊過程がいまだに続いている一面があるとも言えます。

帝国の崩壊によって、第一次世界大戦後、ドイツ・オーストリアの支配下にあったスラヴ、バルトの小国が、米ウィルソン大統領の提唱する「民族自決権」を背景に、一斉に独立を達成していくことになります。

しかし、多くの民族が入り組んで集住している地域において境界線を定めるのは極めて難しく、その境界線決定による不満や不公平意識から紛争の源は残ったままでした。

とくに分裂の歴史をたどってきたスラヴ民族の国家・国境制定は、多くの問題を残したままでした。その後ベルサイユ体制下のドイツの復興とヒトラー政権の出現などを経て、第二次世界大戦と微妙に絡みあっていくことになります。

また、東スラヴはロシアが主導するソ連社会主義体制に組み込まれ、ウクライナ、ベラルーシは本当の意味では独立できなかったとも言えるかもしれません。

スラヴ民族賛歌に人生を捧げた画家ミュシャ

第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて、スラヴ民族主義を高らかに掲げ、「スラヴ叙事詩」という壮大な連作絵画

を描いた人物がいました。アルフォンス・ムハ（ミュシャ）です。

ムハ（ミュシャ）は、1860 年チェコ共和国に生まれました。ウィーンへ行き、舞台装置専門の工房で働いた後、ミュンヘンの美術アカデミーを卒業し、パリへ出ます。大女優サラ・ベルナルが主演する演劇のポスターを制作したところ、それが大評判となり、サラと 6 年契約を結んでアルヌーボー・ポスターをたくさん描いて有名になりました。ミュシャの作品は今でも多くの女性に好まれていて、一度や二度は見た人が多いのではないかと思います。



アルヌーボー画家として成功していたのですが、ある時突然、ムハ（ミュシャ）は「スラヴ民族の偉大な歴史と文化を残さなければならない」と決意します。1909 年、48 歳の時にボストン交響楽団が演奏するスメタナ（チェコの作曲家）の交響詩「わが祖国」を聞いて決断したと言われています。翌年から「スラヴ叙事詩」の制作を開始して、20 年間で 20 点の巨大な絵画を描き上げ、チェコ国民とプラハ市に寄贈し



「スラヴ叙事詩」の巨大な絵画を描くムハ

ました (1928 年)。彼は 1939 年にドイツ軍がチェコに侵攻した直後に逮捕され、その後、肺炎で亡くなりました (79 歳)。

ミュシャはスラヴ民族主義に命を捧げた最後の人物だったかもしれません。第二次世界大戦後、欧州連合 (EU) が構築され、ゲルマン民族主義やスラヴ民族主義の時代は終わったように見えます。しかし、ウクライナでは、現在、ウクライナ西部を中心に、EU 加盟を求めながらウクライナ民族主義が高揚しています。一方、ウクライナの東部のロシア系住民地域では、「ロシア民族主義」が、同じように高揚し、ロシアへの復帰を求めています。

チェコもポーランドもウクライナも、ロシアとぶつかり合っている今の状況では、ミュシャが想い描いた「スラヴ民族賛歌」というようなものは、もはやなくなり、スラヴ民族が統一・団結することはないということかもしれません。

第二次世界大戦

1939 年 9 月 1 日、ドイツ軍がポーランドへ侵攻し、イギリス・フランスが直ちに宣戦布告して第二次世界大戦が始まりました。ソ連は直前の 8 月 23 日に独ソ不可侵条約を結んでおり、その秘密議定書でポーランドの分割占領を合意していました。9 月 15 日、ドイツ軍に続いてソ連軍が東からポーランドに侵攻します。

ドイツ軍は、戦争初期において破竹の進撃を続け、フランス、オランダを占領、東欧諸国も支配下に入れました。この結果、ソ連を除いてスラヴ諸国の大半がドイツに占領されるか、ブルガリア、スロヴァキアのように親独政権を樹立させることになります。

1941 年 6 月 22 日、ドイツ軍は突然ソ連への侵攻を開始し、独ソ戦が始まります。欧州戦線は独伊枢軸国側と英露連合側が対決、これに米国が連合国側につくことで、戦争の帰趨が決まることになりました。ウクライナ、ベラルーシ、バルト 3 国はドイツに占領され、ソ連はモスクワまで深く迫られながら、1941 年の冬をもちこたえ、アメリカの軍事支援を受けながら反撃に転じて、ソ連西部および東欧諸国を解放しました。

一方、米英連合軍はノルマンディ上陸作戦でフランスはじめ西欧諸国を解放し、1945 年 5 月のソ連軍のベルリン陥落で第二次大戦・欧州戦線は終結しました。

第二次世界大戦終了後の世界

第二次世界大戦後、世界はソ連を中心とする社会主義諸国と米国を中心とする資本主義諸国に分かれました。東西世界対立と言われ、「冷戦時代」が始まります。おおむね第二次世界大戦終了時の占領線が東西を分ける境界線となり、チャーチル英首相が「鉄のカーテン」と呼んだ東西分断が起きました。欧州では米欧中心の軍事同盟 NATO (北大西洋条約機構) とソ連を中心とする WATO (ワルシャワ条約機構) の二

つが軍事的に対峙することになりました。

スラヴ民族の大半はソ連軍占領地域に入っており、東欧ではさらに東ドイツ、ルーマニア、ハンガリーといったスラヴでない国もソ連社会主義陣営に入ることになりました。しかし、「ハンガリー動乱」(1956 年)、「プラハの春」(1968 年)、「ポーランドの連帯運動」(1980~82 年)、そして「ペレストロイカ」(1985~91 年)といった様々な問題が起きて、「ベルリンの壁」崩壊 (1989 年) とソ連邦解体 (1991 年) でソ連社会主義体制は終焉を迎えました。

西スラヴ諸国は親西欧陣営に向かい、南スラヴはユーゴスラビアを中心に国家分裂が起きて内戦状態になりました。最後まで残っていた東スラヴでは、今、遅ればせながらロシア・ウクライナ戦争が起きています。

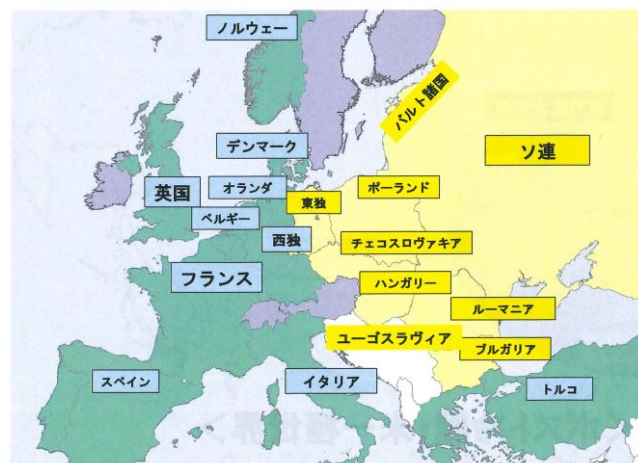
第二次世界大戦初期

(1939 年 - 1941 年)



第二次世界大戦後の東西対立世界

スラヴ諸国の大半がソ連社会主義圏に入ることになる



ウクライナ近現代史

第二次世界大戦後のヨーロッパでもう 1 つ重要なのは EU (欧州連合) なのですが、時間がなくなってしまいました。最後にウクライナの近現代史に触れて話を締めくくりたいと思います。

これまでの話で、ウクライナについては、キエフ・ルーシ

時代以外はほとんど説明しませんでした。なぜかと言うと、国家ができなかったからです。13 世紀のモンゴル支配の後、20 世紀に入るまで、東スラヴのウクライナ地域では、ほとんど、国というまとまりが作られませんでした。結局、ウクライナという国家が現在の形になったのは、第一次世界大戦とロシア革命後です。様々な戦争と国家独立の動きが起き、最終的に、ソ連という連邦国家が構築される中で、「ウクライナ社会主義共和国」が生まれました。

キエフ公国以降、蒙古軍の襲来に始まり、リトアニア公国の南下、ポーランド・リトアニア連合の支配、さらにロシアの発展・拡大が押し寄せ、ウクライナが自立した国家となることできない期間が長く続いたということになります。

また、ウクライナの地で、ロシアとポーランド・リトアニアが支配を広げるためにぶつかり合いました。これはカトリックと東方正教会のぶつかり合いでもあります。ウクライナ地域について言えば東ウクライナと西ウクライナの戦いでもありました。また、南部にはクリミア・ハン国というオスマン帝国（イスラム教）の影響地域がありました。

つまり、中世から近世の時代変革期、ウクライナは宗教的には三分割されていました。ウクライナの大半はロシアの東方正教会地域で、西ウクライナ（ガリツィア）はギリシャ・カトリック教会地域、クリミアはイスラム系タタール系住民の地域でした。

ギリシャ・カトリック教会というのは、東方典礼カトリック教会とも言われ、経典は東方正教会で、組織的にはローマ法王のカトリック教会に属するキリスト教会です。その分裂・対立の歴史は、今も残されています。

第一次大戦とウクライナ

第一次世界大戦ではロシアとドイツがぶつかり、ウクライナを囲む四つの帝国（独露奥オスマン）が崩れました。帝国時代が終わり、ウクライナでは民族主義が高揚し、大きな転機が訪れます。ロシアの 2 月革命の影響を受けて中央ラーダという自治組織が結成されるのですが、10 月革命のあと中央ラーダはボリシェビキ政権と対立、革命軍（赤軍）と反革命

軍（白軍）がぶつかり合うなかで、貧農を中心とするマフノ農民軍や中央ラーダ軍など様々な武装勢力がウクライナ全土で戦乱状態を繰り返しました。

さらにオーストリア帝国の瓦解によりポーランドとウクライナの住民衝突が起こります。中央ラーダから「ウクライナ人民共和国」が作られ、またガリツィアでは「西ウクライナ人民共和国」が独立を宣言しました。しかし、ガリツィア（西ウクライナ）軍はポーランドに敗北してその支配下に入り、中央ラーダ（ウクライナ人民共和国）軍は赤軍に平定されて、ウクライナ社会主義共和国へと吸収され、1922 年に成立したソ連邦に組み込まれました。

結局、第一次世界大戦とロシア革命の結果、ウクライナ国民の統一は成立せず、ウクライナが自立へと動くのはソ連崩壊後になったわけです。ソ連邦成立以降に、ウクライナの領土がどう変わったかを示したのが左の図です。

第二次大戦とウクライナ

第二次世界大戦で何が起きたかと言うと、まず 1939 年 8 月の独ソ不可侵条約とドイツ軍およびソ連軍の侵攻でポーランドが分割され（同 9 月）、ガリツィアはソ連の勢力圏となりウクライナに併合されました。

しかし、その後、ドイツがソ連に攻め込んで独ソ戦が勃発（41 年 6 月）。ドイツ占領下のウクライナでは対独抵抗軍が組織されました。しかし、西ウクライナのガリツィアではウクライナ民族主義者組織（OUN）の指導者ステパン・バンデラ率いるウクライナ自由軍（OUN 軍）がドイツ軍側につき、西ウクライナのバンデラ軍は、ナチス・ドイツに協力してユダヤ人を虐殺だけでなく、ロシア人もたくさん殺害しました。

このバンデラを民族の英雄として信奉するウクライナ民族主義者（バンデラ主義者）を、現在、プーチン大統領は「ネオ・ナチ」と呼んでおり、ウクライナ紛争の背景には、このネオ・ナチの大きな動きがあったと主張しています。

ただ、ドイツ軍に従ったバンデラ自由軍は、その後ウクライナの独立を宣言します（1941 年 9 月）。しかし、ドイツ軍

ウクライナ領土の拡大 1922 年～1954 年



西ウクライナの過激な民族主義者

ナチス・ドイツのカギ十字、アゾフ大隊、北大西洋条約機構(NATO)の三つの旗を掲げている。



は独立を認めず、バンデラは逮捕されて、ザクセンハウゼン収容所に送られました。ウクライナの民族主義者たちは 1942 年にウクライナ蜂起軍 (UPA) を樹立し、反ソ・反独の戦いを続けます。第二次大戦後もウクライナ蜂起軍はガリツィア地域で反ソ・パルチザン闘争を続け、10 年間にわたって抵抗を継続しました。

ソ連崩壊後、西ウクライナでは再び過激な民族主義が生き返ります。ソ連崩壊後に、私は西ウクライナへ行ったことがあります。車で走っていくと、地域全体に黄色い旗がはためいていました。黄色の旗はソ連 (ロシア) との戦いのシンボルです。これはちょっとやそつとでは、抵抗は止まらないだろうなと思ったものです。

一方、当時の東ウクライナでは、まったく別の雰囲気、黄色の抵抗の旗を見ることは一切なかったです。

ロシアのプーチン大統領は「ネオ・ナチ」と呼び、ウクライナ西部の過激な民族主義者たちの行動を、特別軍事作戦を開始した理由の一つに上げました。

現在のウクライナ政府は、彼らはたいした勢力ではなく、政治的な力はないと説明しています。しかし、写真のような人たちがいることは事実です。ナチス・ドイツのカギ十字、アゾフ大隊の旗、北大西洋条約 (NATO) の旗。この 3 つを掲げ、武装し、ウクライナの独立とロシアへの批判を主張しています。

今日のウクライナ戦争の背景には、スラヴ民族の分裂と紛争の長い歴史があります。スラヴ民族だけでなく、ヨーロッパの諸民族・諸国家との関係や近現代の歴史を踏まえて、今後の国際秩序を考えていく必要があると思います。(了)

<補遺>

欧州連合 (EU) とプーチン大統領のユーラシア統合構想

第二次世界大戦後のヨーロッパでは、戦後復興を支えるために欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) が 1952 年に設立されました。背景には、独仏は「二度と戦争をしない」との思いがありました。参加国は、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ、フランス、西ドイツ、イタリアの 6 カ国です。

次いで、これを母体に成立したのが、欧州経済共同体 (EEC/1958 年)、欧州共同体 (EC/1967 年) です。その後、イギリス、アイルランド、デンマーク、ギリシャ、スペイン、ポルトガルの 6 ヶ国が加わって「拡大欧州共同体」(12 カ国) となりました。

この拡大欧州共同体が、東西冷戦終結 (1989 年) とソ連崩壊 (1991 年) を受け

て改組され、欧州連合 (EU) へと成長・拡大していきます。欧州連合自体は、1993 年のマーストリヒト条約の発効でスタートします。その後、1999 年の欧州統一通貨「ユーロ」の導入で、欧州全域から多くの国が加盟を申請し、欧州連合は当初の 12 カ国から現在は 27 カ国に拡大しました。

旧ソ連圏からはバルト三国 (リトアニア、ラトビア、エストニア) が 2004 年に加盟し、スラヴ圏からは、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、スロヴェニア (同 2004 年)、クロアチア (2013 年) の 5 カ国が加盟します。

現時点での加盟候補国は、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、北マケドニア、セルビア、ウクライナ、モルダヴィア、アルバニア、トルコの 8 カ国となっています。また、ジョージア (グルジア) も加盟申請し、今回のウクライナ戦争でその動きが強まりそうな勢いです。

残されたのはロシアとベラルーシです。なかでも、ロシアは欧州から追放され、村八分にされたような状況です。しかし、ロシアは本当に欧州の一部ではなくなったのか？ 欧州連合と NATO はどこまで欧州を広げるつもりなのか？ という疑問は消えていないです。

欧州連合では、リーマンショックによる世界的な経済不況や難民問題への対処などで、加盟国の不満や批判が続出しました。2020 年、英国の国民投票で欧州連合脱退という大きな事件が起きました。ウクライナ戦争では、一時的に欧州連合の問題がなくなったように見えますが、根本的な問題解決にはなっていないと思います。

プーチン大統領は、欧州との統合が無理になったことで、東方政策へと方針を転換しました。旧ソ連諸国を統合するユーラシア経済連合をはじめ、様々な統合案を発表し、域内協力構想を進めました。ただ、プーチン大統領は欧州との関係を拒否したわけではなく、ロシアが欧州連合に入る拡大欧州、大欧州、欧州同盟等の構想も発表していました。

さらに、上海協力機構やユーラシア経済連合を軸に「大ユーラシア・パートナーシップ構想」を打ち上げ、ユーラシア



全体の統合を最終目標に掲げました。

一方、ウクライナ戦争が続く中で明らかになってきたことは、BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）に代表される新興諸国や上海協力機構、アフリカ連合など、いわゆるグローバル・サウスの力が強まっていることです。世界は欧米でまとまっている時代は終わりつつあります。スラヴ諸国も欧州連合に入るだけで経済発展ができるのか、大きな問題を抱えています。

そして、ウクライナ戦争で明らかになってきたのは、超大国・米国の力が弱まっており、その一方で、ロシアも、今や世界秩序を維持する力は持っておらず、双方とも、ほころび始めた世界を立て直すことができなくなっている現実です。

超大国が世界を支配し、秩序を確立した「二極世界時代（もしくは、米国一極時代）」が終焉を告げ、超大国が力を失いつつある時代に入っています。ウクライナ戦争の始まりの背景でもあり、ウクライナ紛争がなかなか終結しない理由にもなっています。

近い将来、新世界秩序時代が出現し、平和と安定の世界を作り出す可能性はあるかもしれませんが、その可能性は、まだ見通すことができず、混乱が続く可能性が強いと思われます。逆に、ウクライナ戦争、アルメニア・アゼルバイジャン紛争、イスラエル・ハマス戦争など、様々な紛争が世界のあちこちで噴出しています。

そして、台湾を含む米中対立が最後にやってくるかもしれません。世界は地政学的地殻変動の大きな揺れが始まった雰囲気でもあります。その分裂は、地盤が弱い地域から始まり、世界に広がる可能性が強いと思われます。過去 2 度の世界大戦は、スラヴ民族地域から始まりました。大きな亀裂が再び、スラヴ地域で始まり、世界的混迷へと突入する可能性は捨てきれません。第三次大戦が欧州で始まるということがないように祈るばかりです。

＊ ＊ JIC のロシア語留学 ・ 研修 ＊ ＊

35 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学 4 月生 ・ 募集中



**オンライン
相談 受付中!**

期間：2024 年 4 月 1 日より 10 ヶ月

締切：2024 年 1 月 12 日

モスクワ国立大学 1,158,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,039,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ゲルツェン教育大学 908,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ウラジオストク極東連邦大学 418,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ミンスク国立言語大学 422,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金
および取得手数料などががかかります。

**ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)**

◆ JIC ロシア留学デスク ◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

◆◆ 編集後記 ◆◆

▼本号も、講演録、日ロ交流情報、本の紹介、黒田龍之助さんの連載コラムと盛りだくさんです。▼石郷岡建氏の講演録「スラヴ民族一分裂と紛争」は圧巻です。一気に読むには読みごたえがありすぎますが、諸民族の長い歴史のなかで、イデオロギーよりも宗教や民族意識・民族感情というものがどれほど強い影響力を持ち、それぞれの国の在り方に反映されるものか、深く考えさせられました。▼ウクライナ戦争がいつ、どのような形で停戦・和平を迎えるか、明確に予測することはできませんが、戦況の膠着と米欧の「支援疲れ」、パレスチナでの戦火拡大など、早期停戦を求める国際世論の圧力は今後ますます強まるだろうと思われます。停戦交渉ができるだけ早く始まることを願います。▼戦争の長期化で、日ロの経済的・文化的交流は細り続けています。多くの日本人がロシアを危険な国と思っているのは仕方のない現実ですが、ロシアは厳然として日本の隣に存在しています。危険な国であればあるほど、その内情を知り、つきあい方を考えなければなりません。そのためにも、私たちは日ロの人的交流・文化・学術交流を絶やさぬよう、今できることをやり続ける必要があります。

本年もよろしくお願いいたします。(F)

